

もっと読みたいんだけど・・・

消化器内科 古賀浩徳

図書館から足が遠のいて久しい。大変申し訳ないが、もっぱらオンラインジャーナルを提供してくれるだけの存在になってしまっている。読書量も減った。もちろん医学論文や書物には目を通すが、多忙に加齢性の調節障害も加わり、エッセイなど長編を読むのが苦痛になってきている。ひどく残念に思う。ただ、万物に興味を失っているわけではない。むしろ、余暇を見つけては釣りや写真、スポーツなどアウトドアの活動に勤しむようになり、総体的には以前にも増して五感を刺激する生活を送っている気がする。そのようなわけで蔵書は多いとは言えないが、過去に読んだ本から印象深かったものをいくつか挙げてみたい。

「古寺歩きのツボ」井沢元彦 著（角川書店）。著者によれば、古寺を探訪することによって日本がわかるという。確かに、古寺には仏像（宗教）、建築、庭園がつきもので、それぞれを構成する要素とそれらが織りなす様式美の観察から、日本特有の美学がどのようにして醸成されたかを、静謐な時空の中で洞察することができる。留学先で痛感した母国に関する無知を、この本を読むことで払拭しようとしたのが購入のきっかけだった。古寺と日本に対する見方が変わる一冊。

「テロリストのパラソル」藤原伊織 著（講談社）。初読時と異なり、テロリストという言葉にリアリティがある現在、一層引き込まれる興奮を味わえるかもしれない。結末で、テロの背景に極めて人間くさい根源的な欲や情念がありうると指摘した点、意表を突かれた。精緻な構成と無駄のない文章、乾いた情景描写が好きだったが、残念ながら彼の新作を読むことはできない。2007年、元電通マンの彼は59歳でこの世を去った。本作は江戸川乱歩賞・直木賞をダブル受賞したことで話題を呼んだ。この他、彼の短編集「雪が降る」（講談社文庫）も秀逸。

「文明の逆説」立花隆 著（講談社文庫）。文明の誕生は初期条件として未来における崩壊を内包しているという歴史的事例（例えばローマ帝国）を挙げながら、今後の日本に「別の文明」が生まれるだろうか、と氏は問う。1976年に書かれていながら、色褪せるどころか、現代文明の必然的内的崩壊を予言しているかのように見え、驚く。米国肝臓学会（シカゴ）からの帰路、なぜかハワイのビーチで読んだ。昔はおおらかな時代だった。

「大世界史」池上彰・佐藤優 著（文春新書）。対談集なので深みはないが雑学的知識を得るには手頃。この書のキーワードは“奔流”だと感じた。難民、富、情報、憎悪、差別、宗教……。さまざまな格差と硬直化した二項対立がもたらす荒ぶる世の流れ。一見カオスに見える激流の源がどこにあるのかを、わかりやすく解説してくれる。

さて、もうすぐ彼岸。土手や畦道にはすでに曼珠沙華（彼岸花）が満開である。周囲はすっかり秋の趣。この企画のおかげで秋の夜長に本でも読もうかという気になった。iPhoneの画面をスクロールする代わりに。